

---

# F a t e / Z e r o 騎士王の影

Mr.U

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/Zero 騎士王の影

### 【Nコード】

N0201BA

### 【作者名】

Mr.U

### 【あらすじ】

本来召喚されるはずの無い歴史から抹消された者。

彼が召喚に応じた理由は何なのか？

本来と異なる歴史、異なる聖杯戦争、その結末は誰にもわからない。

Fate/Zeroの二次作です。

まあ気楽に読んでください。

第一話 召喚（前書き）

取り敢えず書いて見ました。

## 第一話 召喚

『問う。』

汝、我を此度の宴に誘いしマスターか？』

召喚されたのは本来あり得ないサーヴァント。  
アサシンのクラスに呼ばれた騎士王の影。

「ああ、私がお前のマスターだ。」

彼を召喚したのは言峰 綺礼。

元代行者にして遠坂 時臣の弟子である魔術師だ。

そして、此度の聖杯戦争で師を勝ち残らせる為に魔術を学んだ者でもある。

しかし、その綺礼は不思議な感覚に陥っていた。

サイド 綺礼

目の前のサーヴァントは顔を何も書いていない真っ白の仮面で覆い、  
真っ黒の外套と服。

低い声が頭に直接響くようで、不快な感覚を与えて来る。

その姿は何処までも不気味に思えた。

違う。

自分はそれとは異なる不気味さを感じた。

何故なら英霊であるはずなのに殆ど存在感が感じられないのだから。  
しかし何故かその仮面のしたの表情を感じ取れた自分がいた。

「（何だこの感覚は。」

まるで私の中の満ちたりぬ何かがあのだサーヴァントに惹かれていく

様だ。

何故だ？

……そうだ、このサーヴァントは同じなのだ。  
私と。

この英霊になら分かるやも知れない。  
この満ち足りぬ心とその答えを。」

言峰 綺礼は人の身でありながら精霊となったこの超越者が自分が  
求めた答えを持っていると確信した。

「無事召喚できたようだね綺礼。  
ほとんどCかDばかりだがアサシンなのだから問題ないだろう。」

召喚陣の外側で見ていた時臣と父が言峰 璃正が近付いて来きた。  
ステータスがCかDばかりだと？

確かに耐久と魔力はCだが、筋力はB+で俊敏に至ってはAだぞ。

綺礼は戸惑った。

まさか我が師がパラメータを読み違えるなどというミスを行うとは思えず困惑の表情を浮かべているとサーヴァントから話しかけてきた。

『マスター、それは彼のミスでは無く。

私のスキルである隠蔽が働いているからです。

手の内を無闇にさらさないのは戦争の基本です。』

どうやら自分のサーヴァントのスキルによるものらしい。

この事は師に話した方が良さそうだ。

しかし、綺礼は話さなかった。

理由はわからない。  
何故かここで全て話してしまうと、自分の探し求める答えにたどり着けない気がした。

綺礼は適当にスキルをでつち上げて話し、自分のサーヴァントは強くはないが援護するだけならかなり便利なサーヴァントであると説明した。

「そうか、複数に別れることができる宝具か。

中々いいサーヴァントの様だ。

期待しているぞ綺礼。

では今度は私の番だな。

ふふふ、いい触媒が手に入ったんだ。

この触媒を使えばおそらく至上最高のサーヴァントが召喚できる。

情報収集は君に任せるよ綺礼。

聖杯戦争が待ち遠しいではないか。」

師がワイングラスを片手に笑っている。

すみません師よ。

私はあなたを騙している。

師を騙していることによる心の痛みを心地よく感じながら、綺礼は部屋を後にした。

「アサシン」

『11111』

自分の部屋へと戻った綺礼はアサシンに自分と時臣の関係を話した。

「だから聖杯を手にする事はない。

残念だが聖杯は諦めてもらおう。」

綺礼はこの事実に関自分のサーヴァントがどういった反応をするのか気になった。

『マスターは聖杯に叶えて欲しい願いが無いのか？』

予想していた通りの答え。

つまりない、まったくもってつまらない。

「私には聖杯に願う願いはない。」

貴様にはあるのか？

私と同じような貴様に。

『ワシも聖杯にかける願いなぞ無い。

しかし、お主は違うのではないかマスター？』

予想外の切り返し。

彼に願いが無いのは予想できた。

しかしまたもや彼？の雰囲気が変わった。

今度は老人のようだ。

自分に似た存在。

触媒無しで召還されたサーヴァントは自然とマスターに相性のいい者が召喚される。

いわば自分自身を触媒として召喚したも同然である。

よって同じ願いが無い者を召喚できる可能性もあった。

しかし、それがどうだ。

今自分のサーヴァントは私が願いを持っていると言った。

何故だ。

「何故そう思う？」

私が願う事など無いのだが。」

当然の疑問。

『ならば何故、奴らに我の正体と本当の能力を話さなかった。』

その問はことなる問をもって返された。

確信を突かれていた。

これは自分自身でもわからないこと。

自分は聖杯が欲しいのか？

自分に叶えたい願いがあるのか？

わからない。

綺礼は思考の渦に埋れて行った。

『まあ、そのことについてはじっくり考えてください。  
必要な時は先程のように名を呼べば参ります。』

今度は若い女性のような雰囲気になり、

霊体化して去って行った。

部屋に一人残された綺礼は一言呟いた。

「喋り方を統一してくれ。」

しかし、あのサーヴァントはもう側にいないようだ。  
行き場を失った声が一人きりの部屋で反響した。

あの統一性のなさが余計に綺礼の思考を混乱させた。

## 第一話 召喚（後書き）

Mr. Uです。

何となしに書いて見ました。

よければ感想などを書いて頂けると嬉しいです。

ちなみに綺礼はアサシンを召喚してすぐに興味の対象がほとんど切嗣からアサシンに変わっています。

もしかしたら切嗣との絡みが少なくなるかもしれませんが。

まあ今後ともよろしく願います。

## 第二話 開催（前書き）

気づいたら明けてた。

まあどうぞ

## 第二話 開催

「ライ卿やノクターン卿、ラヴェル王だけでなく私も王が駆けつけてくださらなければこやつに暗殺されていたことでしょう。」

円卓の周りを騎士達が囲んでいる。その手前に縛られ四人の騎士達によって剣を向けられている者がいた。

これが示すことはこの縛られた者がこの騎士達4人分の戦闘力を有しているという事実である。

四人のうちの一人であるモルドレットは続けて発言する。

「王よこやつが我が国に剣を向けたのは明確な事実です。早急なご決断を。」

「……。」

返ってきたのは沈黙。

「王よこの罪は許されません。斬首以外の道はないかと。」

モルドレットの反対側にいる四人の騎士の一人ガヴェインが冷静な判断を下す。

「本当にそれでいいのですか！？  
彼にも彼なりの訳があるはずです。」

今までだって私たちに黙って私や王を助けてくれたことだってあったはずです。」

この発言は円卓最強の騎士ランスロット縛られている者に向けている剣が少し震えている。

「ランスロット卿それは私に対する侮辱ととっていいのか？」

ランスロットの言うことが正しいのならモルドレッドが王に対して命を狙われるほどの罪を犯しているということになるのだから。

「いや、そうではないのだが…。」

ランスロットは口籠る。

「静まれ！！」

決めるのは私だ。」

皆静まり王のいる方へ顔を向ける。

王は皆が静まるのを待つと静かに判決を下した。

「シェリド卿。

いや、罪人シェリドよ。

貴様を斬首に処する。」

判決は降された。

ランスロットは手を血が出るほど握り締め、モルドレッドはニヤリと笑っていた。

縛られている者シェリドは静かにその命令を受け取った。

誰もがこの判決を色々な思いで受け止めていた矢先、突然縄は引きちぎられ四人の騎士の得物は宙を舞った。

まさに一瞬の早業四人の騎士だけでは彼の唐突な動きについて行け

なかった。

その一瞬でモルドレッドは腹を貫かれ倒れた。  
他の円卓の騎士やアーサーも得物を抜く、そのとき有り得ないものを目にした。

シェリードは自分で自分の首をもいでアーサーに捧げてきたのだ。

「我唯一の王よ。

逆賊の討伐は完了いたしました。

どうかご安心くださいませ。」

仮面の取れた首だけの彼は逆賊討伐完了の言葉とともに永遠に動かなくなった。

サイド 切嗣

「夢か」

最近変な夢をよく見る。

疲れているのだろうか？

「なににせよ今日ここをたち冬木に向かう。

しっかりしる衛宮切嗣。」

自分に言い聞かせる。

全ては聖杯を手に入れ世界に平和をもたらすため。

そしてイリヤと（……）いや、イリヤだけでも幸せにするために。

切嗣は進む過去を無駄にしないために。

聖杯を求め集った7人の魔術師によるサーヴァントを駆使した殺し  
合いが始まる。

彼らがそれを手にしたとき汚れた奇跡は何を叶えてくれるのだろうか？

## 第二話 開催（後書き）

アサシンの過去ではなくセイバーの過去でした。

ライ卿やノクターン卿、ラヴェル王は適当設定です。

細かいところは次回アサシンの設定を投稿しますので少し待ってください。

そして、明けてましておめでとございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0201ba/>

---

Fate/Zero 騎士王の影

2012年1月1日00時50分発行